

## 伐出労働力と「組」組織に関する研究（Ⅰ）

九州大学農学部 遠藤 日雄

### 1. はじめに

従来、伐出労働組織論はいわゆる「組頭制度」論として展開され、その主要テーマは組織にひそむ「前期的なもの」（あるいは「封建的なもの」）の解明に注がれていたといつて過言ではない。しかし高度成長過程において、林業労働力の多くが山村から流出し、伐出労働力は「『存在する』ものから『維持される』ものへと変化<sup>1)</sup>し、さらに低成長期に入った現在では、かろうじて「維持され」ていた労働力さえも、高齢化とそのリタイヤによってその維持が困難になりつつある。こうした山村の経済的機能の解体の進行という苦境のもとで、一方では戦後造林木の成熟によってもたらされる農林家の所得増大の可能性が一步一步現実的になりつつある現在、「ムラ」の再生の論理の確立とともに、新たな伐出労働組織論が展開されねばならない。そこでこれまでの「組」研究を検討することによって、今後どのようなことが解決されなければならないのかを明らかにしてみたい。

### 2. これまでの「組」研究の検討

前述のように、従来の「組」研究の多くは「組頭制度」論の土俵のうえで展開されてきたが、しかしなかには「組」の機能について言及したものや、「組」論として体系的に整理した研究がないわけではない。そうしたものとして、ここでは奥地正、村尾行一、福島康記の3氏の「組」論をとりあげて検討を加えてみよう。

3氏の「組」に対する見解を、いくつかの項目に分けて整理したのが表である。同表をみて明らかなように、「組」形成の基本的特徴や成員の性格と結合度、あるいは素材資本との雇用関係などについては、論者によって若干のニュアンスの違いはみられるものの、ほぼ共通した理解を示しているといつてよいだろう。

問題は「組」の機能、「組」の再生産構造、技能・技術の伝達についての認識の差異であり、とくに再生産構造とこれと関連の深い技能・技術の伝達に関して3氏はそれぞれ異なった理解を示している。すなわち奥地氏の場合は、成員の半農半労の性格に規定されて、

伐出労働の他に土建労働などに就労しているケースもみられ、必ずしも「組」のなかで労働力の再生産が行われているわけではないとの見解をとっている。逆に村尾氏の場合は、生活、労働力の全面的な再生産は行われていた（現在では過疎化の進行で困難になってきているが）としている。福島氏は長くて2～3年としているが、これはむしろ「組」の継続期間であつて、再生産の具体的な構造については触れられていない。

次に再生産構造と不可分の関係にある技能・技術の伝達について。まず奥地氏は、労働力の再生産は全面的に行われていないとしながら、技術の世代的な再生産は行われていると述べているが、これは納得のいかないことである。なぜなら後継者の補充が行われてこそ、技術の伝達が可能だからである。次に村尾氏は、高度成長以前の「仲間集団」では「異齢構成」を基礎にして技術の伝承は行われていたと説明しているが、「同齢構成」が支配的になった高度成長以降は、伝承は困難になりつつあると指摘している。最後に福島氏の場合は、技能の修得は実作業のなかで行われているとしている。

### 3. まとめ

以上のように、「組」の再生産と技能・技術の伝達の仕方については、3氏とも異なった理解を示しているが、重要なことは将来への展望として、現実「組」の再生産は行われているのかを、実態に即して明らかにすることである。もし再生産が行われていないならば、「組」は早晩消滅する運命におかれていることになり、いわば「ポスト『組』」論が実践的に要請されるだろう。そうではなくて、まがりなりにも「組」が再生産されているとしたら、それは村尾氏の表現に従えば「同齢構成的」に、奥地氏の言葉を借りれば「フラットな関係」として再生産されているのか否かが究明されねばならない。このことは技能・技術の伝達のあり方ともつながってくる。というのも、職人が「腕」を磨いて1人前になる「その過程は、いわゆる『封建的な』人間と人間の服従の関係と強く結びついて」<sup>2)</sup>おり、「その秩序は技能の修得の階梯によって支えられている」<sup>3)</sup>といわれており、こうした関係の希薄に

になった「フラットな関係」をもつ「組」組織のなかで、技能・技術の修得と次代への伝達は具体的にどのように行われているのかという点については、ほとん

ど解明されていないのが実状だからである。後日、実態をふまえて明らかにしてみたい。

表. 奥地、村尾、福島3氏の「組」論 ※

	「組」形成の基本的特徴	成員の性格と結合度	「組」の機能	「組」の再生産構造	技能・技術の伝達	素材資本との雇用関係
奥地 正氏 出典：「伐出労働力と『組』組織—京都府山国における素材生産の構造—」(『林業経済』№ 202 所収。1965年)	地縁的な関係を基礎に、「一緒に働こう」という個々の労働者の自発性によって自然発生的に形成。	ほぼ同じ労働力をもっている者と相互に認め合っている者(それ以外もある)。組内部の関係はフラット。	「伐出労働の供給単位、作業単位」であり、「伐出労働力の労働共同体とでもいふべきかなり緊密な関係をもつ労働集団」。また「雇用関係をより開放的、近代的なものとし、労働条件の改善に役立つ」組織でもある。	生活の再生産、労働力の全面的再生産は行われていない。	伐出技術の世代間的な再生産は行われている(その経済的基礎については不明)。	非専属的、分散的。作業「請負」形態が支配的(道具は労働者もち)。
村尾行一氏 出典：「林業生産の発展と従事者問題」(倉沢博編著『林業基本法の理解』所収。1966年)	労働手段とその体系が人間労働力支出を支配しえないという林業労働の特質によって必然的に形成。その形成形態は自生的。	高度成長以前は「気の合った仲間」を中心とした「異齡構成」が支配的。高度成長以降は「同程度の技能と考える者たちによる同齡構成(仲間意識の衰退)。	「労働力—生活や技術をも含めた—を再生産する真の労働集団」このほか雇用条件の改善を図り、雇用機会の確保、開拓を行なう。また成員相互の技術的練磨を行なう。	生活、労働力の全面的な再生産が行われていたが、現在では困難な状況におかれている。	高度成長以前の「仲間集団」では未熟練者の適宜編入と技術伝承が行われていたが(その基礎は異齡構成)、現在は困難になりつつある。	出来高払制。
福島康記氏 出典：「素材生産の構造—北海道の実態を中心として—」(『林業経済』№ 212 所収。1966年)	成員相互の性格・力量・技能程度の熟知分業・協業上の技術的合理性・分配上の合理性を基礎に、血縁・地縁関係のもとに自生的に形成。	地縁、血縁関係を基礎にして、力能の揃ったグループから年齢・力能・性格の異なったものまでさまざま。特に技能を要する作業や危険な作業の際には緊密な関係が要求される。	自生的技能集団。企業(素材資本)の側の組織と結合し補完され、全体として生産の技術的組織として機能。	その場限りの「組」から10年近くに達するものまでであるが、全体としては2~3年続けば長い方である。	素材業者の労働力管理が一義的、間接的に単純出来高給制で行われ、集団作業は様々の力能があることによって技能の修得は、実作業のうちに行われている。	継続的、不規則的。団体出来高給(道具は労働者もち)。

※ 村尾氏は「組」と呼ばずに「自生的仲間集団」の呼称を与えているが、ここでは便宜上「組」として扱った。

引用文献

- (1) 堺 正紘：日田林業地帯、塩谷 勉、黒田迪夫編、林業の展開と山村経済、345、御茶水書房、東京、1972
- (2) 中岡哲郎：人間と労働の未来、45、中央公論社、東京、1970